

ルイス・パジェット「ボロゴーヴはミムジイ」と
ロバート・シェイ監督『ミムジー：未来からの
メッセージ』について

山内 暁彦

Lewis Padgett's "Mimsy Were the Borogoves"
and Robert Shaye's *The Last Mimzy*

YAMAUCHI Akihiko

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 2433-345X

第 28 卷 別刷 2020 年 12 月

Off-printed from *Journal of Language and Literature*
The Faculty of Integrated Arts and Sciences
Tokushima University

Volume XXVIII, December 2020

ルイス・パジエット「ボロゴーヴはミムジイ」と
ロバート・シェイ監督『ミムジー：未来からの
メッセージ』について

山内 暁彦

Lewis Padgett's "Mimsy Were the Borogoves"
and Robert Shaye's *The Last Mimzy*

YAMAUCHI Akihiko

Abstract

This essay examines Lewis Padgett's "Mimsy Were the Borogoves" and Robert Shaye's film adaptation *The Last Mimzy*. Both are inspired by Lewis Carroll's *Through the Looking-Glass*. In the original story by Carroll, 'mimsy' is one of the hard words in the poem 'Jabberwokky.' In the film, the word is turned from an adjective into the proper name of a stuffed bunny. It carries the DNA of a pure child Emma to the future and saves the future generation that is going to become extinct. The spelling of 'mimsy' also has been changed from '-sy' to '-zy' making a new word 'Mimzy,' by which it is indicated that it is no longer an adjective. Owing to these alterations the film is made easier to understand for the public than the original short story by Padgett. Surprisingly, Alice Liddell appears in the short story by Padgett as a true author of 'Jabberwokky' and we are informed about the circumstance of the creation of the Alice books. It seems a very exciting hypothesis for enthusiastic Alice fans. On the other hand, Emma in the film finds in the book a picture of Alice, who is holding a stuffed bunny almost identical to the one that Emma always caresses. Alice in the film is one of the predecessors of the savers of humankind. Thus, both the short story and the film depict Alice Liddell as an important figure, though the theme and details of each work of art differs very much.

序

本論では、ルイス・パジェット (Lewis Padgett) の短編「ボロゴーヴはミムジイ」“Mimsy Were the Borogoves” (1943) と、その映画化作品であるロバート・シェイ (Robert Shaye) 監督『ミムジー：未来からのメッセージ』*The Last Mimzy* (2007年公開) を取り上げる。¹ 映画化においてはいかに数々の工夫が施されているかについて、これらの作品の元となった、ルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832-1898) の『鏡の国のアリス』*Through the Looking-Glass* (1871) の中の詩「ジャバーウォッキー」‘Jabberwocky’ の中の語句 ‘All mimsy were the borogoves’ に注目して考察する。「ジャバーウォッキー」を起源とし、短編「ボロゴーヴはミムジイ」を経て、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』が出来上がったのであるが、映画では、ミムジー (Mimzy) という名を持つウサギのぬいぐるみが新たに創作され、エマ (Emma) という名の主人公の少女の純粋な DNA がミムジーを介して未来に届けられたことで、絶滅に瀕した未来の人類が救済されるという、壮大、かつ人間味のあるテーマが新たに設定されている。こうした新機軸を含めた、監督のロバート・シェイ、脚本のブルース・ジョエル・ルービン (Bruce Joel Rubin) をはじめとする映画制作者たちの創意工夫について考察する。その際、「ミムジイ／ミムジー」(mimsy/mimzy) という語の品詞の変化と綴りの変化が重要な鍵を握るであろう。合わせて、この語を固有名として持つ様々な人物を俯瞰する。本論では、『鏡の国のアリス』の「ジャバーウォッキー」と、短編「ボロゴーヴはミムジイ」、並びに、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』の3者の関わりを詳しく見ていくことで、とりわけ、3者の中で最も新しい制作年代を持つ、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』の持つ問題点、並びに評価すべき点を共に明らかにしたい。²

¹ パジェットは、ヘンリー・カッター (Henry Kuttner, 1915-1958) と C.L. ムーア (Catherine Lucille Moore, 1911-1987) の夫婦共同のペンネームである。

² 映画『ミムジー：未来からのメッセージ』は、日本語の長々しい副題が、シンプルで短い英語のタイトル *The Last Mimzy* とそぐわないのであるが、本論では、短編「ボロゴーヴはミムジイ」と表記上の区別をつけるために、多少煩雑であるが映画の副題を省略せずに記す場合がある。

I

はじめに、本論で扱うことになる諸作品の概略を順に述べる。まず、「ジャバーウォッキー」は、ルイス・キャロル作『鏡の国のアリス』の始めの方で紹介される詩である。これは、鏡の国に自ら進んで入り込んだアリスが手にする一冊の本に書かれたものである。鏡の国の本であるので文字が左右逆に印刷されていて、初めは何が書かれてあるか、アリスにはまったく訳が分からない。鏡に映し出すことで文字はアルファベットで書かれているということが分かる、という仕掛けになっている。ところが、その綴りを読むことこそできても、その内容はかなり難解であり理解不能である。大雑把に言えば、誰かが何かを退治したらしいが言葉が特殊で何だかよく分からない。退治した怪物が「ジャバーウォッキー」という名前であることははっきりしているのであるが、全体として、‘wabe’、‘gyre’、‘gimble’などの様々な造語が散りばめられていて理解が覚束ない。そこでアリスは、“Somehow it seems to fill my head with ideas—only I don’t exactly know what they are!” 「なんだかいろんな考えで頭がいっぱいになるようなのに—どういう考えなのかははっきりしないのよ」と嘆くこととなる。³ アリスだけでなく我々読者も同様である。そこで、アリスも読者も共に、作品の中ほど、第6章で、ハンプティ・ダンプティ (Humpty Dumpty) が解説をしてくれるまで待たねばならなくなる。彼の解説もどこまで信用できるか定かではないものの、詩の言葉の語釈が彼によって語られ、詩全体の大まかな意味が分かってくる。本論では、「ジャバーウォッキー」の詩の3行目の ‘All mimsy were the borogoves’ という、これまた一読して何のことか訳が分からない、謎めいた詩行のみに着目して、‘mimsy’ と ‘borogoves’ についてのハンプティ・ダンプティの解説に耳を傾けよう。もちろんこの詩行だけでなく、他の部分も含めて「ジャバーウォッキー」は様々な面白い語句で散りばめられているのであるが、当面、我々が問題にすべきは上記の部分であるということである。

³ Lewis Carroll, *Alice’s Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass, and What Alice Found There* (London: Penguin Books, 1998) 134. 翻訳は、マーティン・ガードナー／ルイス・キャロル、高山宏訳『詳注アリス 完全決定版』（東京：亜紀書房、2019年）335-336頁を参考にした。

“Exactly so. Well then, ‘mimsy’ is ‘flimsy and miserable’ (there’s another portmanteau for you). And a ‘borogove’ is a thin shabby-looking bird with its feathers sticking out all round—something like a live mop.”

「その通りだ。で、『みむじき』じゃが、『みえすく』と『みじめな』がくっついた（またしても鞆語だな）。『ぼろごうぶ』は羽根を体じゅうにくっつけ回したこぎたない痩せ鳥で生ける箒というところかな、どちらかって言うと」⁴

ここに紹介した訳では ‘mimsy’ を「みむじき」、‘flimsy’ を「みえすく」、‘miserable’ を「みじめな」と、それぞれ訳している。‘mimsy’ と ‘miserable’ は妥当であるが、‘flimsy’ は、普通は「薄い」「弱い」「脆い」などとすべきところ、薄くて透けて見えているから「みえすく」なのではないかとも思う。要点は、‘mimsy’ という語が、異なる2つの形容詞から作られた「カバン語」と称される造語であって、これもまた形容詞であるという点と、発音だけでなく、元の2語が持っていた本来の意味も、ある程度示唆しているという点である。「みむじき」はその点で大変うまい訳語であると考えられる。

次に、ルイス・キャロルから70年余りを経て、ルイス・パジェットによって短編「ボロゴヴはミムジイ」が書かれた。そして、この短編からさらに60年あまり後に制作されたのが、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』である。短編の表題には「ボロゴヴ」と「ミムジイ」が共に使われているのに対して、映画の表題に表れているのは「ミムジー」だけであり、「ボロゴヴ」の姿は見えない。表題も異なっているが、内容に関しても、短編と映画とでは様々な点で異なっている。文学作品の映画化ではよく見られることであるが、本作の場合も「単なる映画化」ではないのである。以下においては、両作品の紹介を、相違点を挙げていくことで行なってみよう。

主な相違点を挙げれば、主人公の兄妹の名前と年齢について、短編では兄ス

⁴ Lewis Carroll, 116. 高山宏訳、468-469頁。

スコット (Scott) が7歳、妹エマ (Emma) が2歳であるのに対し、映画では兄ノア (Noah) は9歳くらいでほぼ同じだが、妹エマ (Emma) は5歳くらいの設定になっていること。妹の名前は同じだ。一方、兄の名前が聖書の人物を思わせる名前にされている理由は定かではない。妹の年齢を上げてある理由の一つは、映画においては、2歳児はさすがに使えないという事情もあったであろう。⁵ テーマに関してもかなり異なっている。短編では、大人と乳幼児とでは脳の働きがまったく異なっており、子供の年齢が低ければ低いほど柔軟性があるのに対し、大人は徐々に型にはまった考え方しかできなくなってしまうというテーマが中心にある。以下の箇所は、作中の登場人物、学者のホロウェイ (Holloway) が、ヒューズの『ジャマイカの烈風』 (Hughes' "High Wind in Jamaica") の中の一説を読み上げる場面からの引用である。

“Babies of course are not human—they are animals, and have a very ancient and ramified culture, as cats have, and fishes [*sic.*], and even snakes; the same in kind as these, but much more complicated and vivid, lower vertebrates. . . . In short, babies have minds which work in terms and categories of their own which cannot be translated into the terms and categories of the human mind.”⁶

「“赤ん坊は言うまでもなく、人間ではない — 彼らは動物であり、非常に古い、分岐した文化を持っていることでは、猫や魚、さらにいえば、蛇などと変わらない。彼らの文化は、今あげたそれらのものと種類も同じである。しかし、それよりはるかに複雑で、生きいきとしている。・・・要するに、赤ん坊の心は、人間の術語や概念では翻訳することのできない術語や概念でもって活動しているのだ”」⁷

⁵ パジエットの短編を演劇化した、Charles G. Taylor の “Mimsy Were the Borogoves: A Play in One Act” では、兄妹とも10代の男女に変更され、さらに年長になっている。

⁶ Lewis Padgett, “Mimsy Were the Borogoves” in Robert Silverberg ed. *The Science Fiction: Hall of Fame, Vol. 1, 1929-1964* (New York: Tom Doherty Associates, 1970) 196.

⁷ 翻訳は、ルイス・パジエット著、伊藤典夫訳「ボロゴーフはミムジイ」(高橋

以上のような記述がなされているが、これは今日の目から見て多少問題があるようだ。しかし、本作の出たのが 1943 年であることを考えればやむを得ない面もあろう。いずれにせよ、この考え方では、子供と大人との差は、年齢差に比例する。短編の方のエマが 2 歳児であることの意味もこの辺りにあるだろう。この差異は、非ユークリッド的な立体パズル（作中では “abacus”）を、子供たちははとも簡単に動かせても、大人にはまったく手が出せないことでもよく表されている。これに対し、映画では、同じように子供を中心に据えてはいるものの、子供はより人間らしく設定されている。むしろ、子供の持つ純粋さこそが人類の抱える汚染や環境の問題を解消できるというテーマが新たに設定されている。また、より能力に秀でた妹を助ける技術者としての役割を兄ノアは受け持たされていて、兄妹の協力によって物事が成し遂げられるという展開も、映画では重要な要素になっている。映画のストーリーの中で、エマと同じ役割が未来の人類から期待されていたアリス・リデル (Alice Liddell) には、兄ノアに相当する協力者はいなかった、ということになっているのである。さらには、短編には登場しない大人として、理科の教師やそのフィアンセが設定されている。また、彼らに付随して、チベットのマンダラ、ドルク、手相見などの要素も付け加えられている。総じて映画の方には、FBI の捜査官も含めて善意の人物が多く登場するようだ。人間味のある作品に仕上がっていると言えるだろう。

最も顕著な差があるのは、いろいろな物体の持つ意味合いではないかと思われる。短編では、未来の異世界からもたらされた、我々人類にとって不可解な各種の物体、ガジェット類は、一種の教育玩具であり、異世界の科学者の気まぐれで偶然地球上に送られてきた物である。これに対し、映画では、先に述べたように、DNA の汚染で絶滅の危機に瀕した人類が存続するための最後の望みという極めて重大な任務が、ウサギのぬいぐるみをはじめとする様々な物体それぞれに負わされている。これらは、それぞれが個々の役割を果たしながら、総合的に一種のタイムマシンを構成することになるデバイスとして、明らかな

良平編『伊藤典夫訳 SF 傑作選：ポロゴーフはミムジイ』（早川書房、2016 年）所収）42 頁を参考にした。

意図を持って未来から過去の世界に送られてきた物であるという点が大きく異なっている。映画の原タイトルの‘The Last Mimzy’の‘Last’とは、それまでにいくつかあった同種の物の「最後のもの」、「最後の頼みの綱」という含みであるのだ。

また、キャロルやアリスの扱い方も大きく異なっている。短編では、最後の場面で急に物語の舞台が過去に遡り、場所もイギリスのテムズ川の河岸に移る。そこで、チャールズおじさんことドジソン（すなわち、ルイス・キャロル）とアリス・リデルとの会話が描かれ、「ジャバーウォッキー」の創作の秘密にとどまらず、『アリス』の2作品、すなわち『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』の創作の真相の一端に迫るような、一種の謎解きが行なわれる。真の作者は実はアリス・リデル自身であったという、アリスファンにとってはこの上ない興味をそそるような仮説が提示されるのである。⁸ これに対して、映画には生身のアリス・リデル自身は登場しない。その代わりに、同種のウサギのぬいぐるみを持ったアリス・リデルの写真を妹のエマが見出す、という展開が用意されている。エマの持っているものと同じ使命を担った同種のウサギが、これまでも未来から過去に送り込まれていたことを示す証拠として、たまたまアリス・リデルが使われているだけのようにも見える。換言すれば、映画ではキャロル色が薄められていると言えるのだが、このことは、町山智浩がネットで語っているように、キャロルファンにとっては多少物足りない部分かもしれない。⁹

物語の結末も、両者はかなり異なっている。短編では、幼い兄妹がいろいろな道具から何らかの「教育」を受けて、親の元を去ってどこか未知の世界へ行ってしまうという場面で終わる。子供たち自身は実に楽しげに去っていくのであるが、一方の親の身からすれば、これは理解のできない、不条理この上ない別れである。これに対し、映画では、いろいろな困難を乗り越えて、少女の涙

⁸ パジエットの短編の持つ意味について詳しくは、拙論「『鏡の国のアリス』「ジャバーウォッキー」中の造語‘wabe’‘gyre’‘gimble’について」の同様の指摘を参照。

⁹ 【町山智浩のアメリカ映画特電】『ラストミムジー』ヘンリー・カットナーのSF小説『ボロゴーフはミムジイ』の映画版 <https://mclip.tv/video/_F82pGS-Z1A/> (2020年11月23日閲覧)

の持つ純真さで人類が救われ、家族4人が改めて一体感を得るという、多少月並みなハッピーエンドの結末である点が目を引く。

以上のように、映画『ミムジ：未来からのメッセージ』は、それが、短編「ボロゴーフはミムジイ」に基づいているとは言え、物語のテーマも細部も、両者はまったく異なっていると言っても過言でない。Emily Midkiff は、これを“loose film adaptation”「緩やかな映画化」と呼んでいるが、その通りである。¹⁰ 映画について目につく難点をさらに挙げれば、昨今、ますます大きな問題として取り上げられてきている、人類を含む生物の DNA の汚染といった環境問題も映画のテーマに含まれるのであるが、風光明媚な自然環境のシアトル郊外の島が主な舞台として設定されていることで、主張が弱められてしまっている嫌いがある。また、映画は枠構造になっていて、最初と最後で、救済後の未来の「青空教室」で、教師によってエマやノアの物語が子供達に向けてテレパシー的に語られる。最後に子供たちが空中に浮かんで行き、家路につく場面の映像は確かに美しい。ただ、これで終わったかと思いきや、さらにその後で、再び場面は現代に戻り、エマが教室で授業を受けている場面となる。にっこりと微笑むエマを最後にまた見られるという点は良いのであるが、映画全体の構成という面では、最後の教室の場面は蛇足ではないだろうか。映画の幕切れで授業の場面が2つ続くので、この映画のテーマには教育問題も含まれるのだろうかとも思えてくる。パジェットの短編の「教育」の残響とも考えられるが、そのレベルはかなり異なっている。以上のように、この映画には賛否両論があり得る付加ないし改変が施されていると言えるだろう。¹¹ このように、様々な相違点があり、評価が分かれる部分があるのだが、短編、映画のいずれも、キャロルの『鏡の国のアリス』や「ジャバーウォッキー」が、あるいは、短編と映画

¹⁰ Emily Midkiff, “The Alien Child” in Michael M. Levy & Farah Mendesso, eds. *Aliens in Popular Culture* (Santa Barbara: Greenwood, 2019), 16.

¹¹ Stephen William Shaufere の “Never, Ever Break Up a Family” (*Journal of Literature and Art Studies*, May 2014, Vol. 4, No. 5, 384-395) によれば、監督のシェイは12年もの期間を映画制作の準備に充てたという。それによって、あまりに盛り沢山な内容になってしまったという面もあるのだろう。

<<http://www.davidpublisher.org/Public/uploads/Contribute/55111ec6ad6cf.pdf>> (2020年11月25日閲覧)

の両者に登場するアリス・リデルその人が、様態や程度の差はあるものの、大きな役割を果たしていることが重要である。

II

短編「ボロゴーフはミムジイ」と、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』を共に扱おうとする際にまず注意すべき点は、「ミムジイ／ミムジー」(mimsy / mimzy) という語の品詞と綴りである。元の『鏡の国のアリス』の中の「ジャバーウォッキー」では、この語を含む箇所は以下のようにになっている。はじめに原文から詩の冒頭の4行を挙げる。次いで、あまたある訳の中から、ここでも高山宏による最新版の訳を引くことにする。

JABBERWOCKY.

*'Twas brillig, and the slithy toves
Did gyre and gimble in the wabe:
All mimsy were the borogoves,
And the mome raths outgrabe*

じゃぼうおつき

そはゆうまだき、ぬめぬらたるとうぶ、
はるかまにぐるまる、ぎりばる。
げにみむじきはぼろごうぶ
もうむたるらあすらひせぶる。¹²

まず、品詞の面を見てみると、『鏡の国のアリス』の「ジャバーウォッキー」では‘mimsy’は形容詞であり、訳でも「みむじき」となっているのは、先の、ハンプティ・ダンプティによる語釈の時と同様だ。パジェットの短編「ボロゴーフはミムジイ」でもそれを踏襲して‘mimsy’を形容詞として用いている。これに対し、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』では、この語は形容詞ではない。そうではなくて、名詞として使われている。しかも、ウサギのぬいぐるみの名前となっているのだ。この、未来からもたらされたぬいぐるみは、中

¹² Lewis Carroll, 132. 高山宏訳、333 頁。

身がナノテクノロジーの塊であり、その中核の部分には何とインテルも入っている。¹³ そして自らを「ミムジー」と名乗るのである。従って、これは、単に名詞というよりはむしろ、固有名詞というべきものである。

綴り字に関しても微妙に変化している。キャロルの『鏡の国のアリス』も、短編「ボロゴーフはミムジイ」も、ともに ‘mimsy’ と ‘s’ が使用されているのに対し、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』では ‘mimzy’ と、‘s’ が ‘z’ に変えられている。つまり、パジェットの短編は、品詞の面でも綴り字の面でも元の『鏡の国のアリス』を踏襲しているのに対して、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』では、独自の改変が施されているということになる。では、この、品詞や綴りの改変にはどのような意味があるのだろうか。また、改変の理由はいかなるものであろうか。

ここで、もう一度『鏡の国のアリス』の「ジャバーウォッキー」の原文を見てみよう。問題とすべきなのは、この詩の3行目、‘All mimsy were the borogoves’である。この文の主語は ‘the borogoves’ であり、形容詞の ‘mimsy’ が、副詞の ‘all’ (すなわち「まったく」とか「すっかり」) を伴って、行頭に来ている(倒置になっている)に過ぎない。先の高山宏の訳では ‘all mimsy’ で「げにみむじき」となっていて、‘mimsy’ には「みむじき」という、古語のような形容詞の造語が当てられていた。‘mimsy’ は形容詞と取ることが正しいのだ。さらに参考のため、別の訳も見てみよう。‘All mimsy were the borogoves’ の1行全体はどのような日本語に訳されているだろうか。そして、‘mimsy’ はどのような日本語に置き換えられているだろうか。いろいろな訳者による訳文を挙げよう。

- 「すべて衰弱ぼろ鳥のむれ」(岡田忠軒、角川文庫、1959)
- 「すっぺらじめなポロドンキン」(生野幸吉、福音館、1972)
- 「もろじめなるもの みなボロゴーフぞ」(芹生一、偕成社、1980)
- 「うたてこばれたるぼろこおぶ」(高山宏、東京図書、1980)
- 「いともかよわなりしはぼろぐるげら」(柳瀬尚紀、ちくま文庫、1988)
- 「げにも よわれなるボロームのむれ」(高橋康成、筑摩書房、1991)
- 「いとかよわれの おんボロゴオヴ」(矢川澄子、新潮文庫、1994)
- 「うたてこばれたるぼろこおぶ」(高山宏、東京図書、1994)

¹³ intel という見慣れた企業名のロゴを用いることで、映画の中の未来世界が、元の短編の場合のような異世界や平行世界の未来ではなく、現実世界の未来であることが示されていると考えられる。

- 「やせがなし よごれじぎ鳥」（高杉一郎、講談社、1994）
「ひたぶるにうすじめきは ボロゴーフども」（脇明子、岩波書店、2000）
「あわすばらしいボロゴーフ」（安井泉、新書館、2005）
「ボショバトたちのみじらしき極まり」（山形浩生、朝日出版社、2005）
「皆みじろい、襤褸濠蕪ら」（河合祥一郎、角川文庫、2010）
「ぼろあわのボロゴーフ」（杉田七重、西村書店、2015）
「オウマたちこそ ふかげんで」（佐野真奈美、ポプラ社、2015）
「みむじきれたるぼろこおぶ」（高山宏、亜紀書房、2017）
「うたてこばれたるぼろこおぶ」（高山宏、青土社、2019）
「げにみむじきはぼろこおぶ」（高山宏、亜紀書房、2019）¹⁴

それぞれの訳の持つ美点や欠点について個別にはコメントしないが、いずれの訳も、先に我々が確認したハンプティ・ダンプティの説明を真摯に受け止めて、かなりの苦勞の末に日本語に訳していると言うことができそうだ。¹⁵ 以上、年代順に列挙したように、多くの日本語訳で‘mimsy’には、いずれも形容詞的な（ないし形容動詞的な）訳語が当てられているのである。仮に「ジャバーウォッキー」の訳についてのわが国の多くの訳者のこうした方針が、大方の意見として正しいとすれば、パジェットの短編の題名「ボロゴーフはミムジイ」も、その元になったキャロルの「ジャバーウォッキー」の場合と同様に、「ボロゴーフは、ミムジイである」という意味を表していると考えて良いことになるだろう。言い換えれば、「ボロゴーフは」を主部とし、「ミムジイである」を述部とする、という解釈が自然なのである。原文では、‘the borogoves’が主語の定冠詞と名詞であり、‘all mimsy’が述語の副詞と形容詞である、とみなせるということである。

¹⁴ 高山宏は、かねてから「ぼろこおぶ」と「こ」を用いて表記していたが、この最新の翻訳では、他の多くの訳者と同様に「ぼろこおぶ」と濁点をつけて「ご」としていて、原語‘borogoves’の発音により近づけている。もっとも343頁の注17の書名の紹介の箇所では相変わらず『げにみむじきはぼろこおぶ』と「こ」のままであって濁点は打たれていない。この件は拙論「『鏡の国のアリス』「ジャバーウォッキー」中の造語‘wabe’‘gyre’‘gimble’について」の同様の指摘を参照。

¹⁵ 筆者の考えでは、山形浩生の「みじらしき」、河合祥一郎の「皆みじろい」、高山宏（2017）の「みむじきれたる」が、いずれも「み」の音を生かしてある点で一日の長があるようだ。対して、佐野真奈美の新訳「オウマたちこそ ふかげんで」は、残念ながら全体が意味不明であり評価できない。

さらに、短編の日本語訳での表記について指摘すれば、普通なら「ミムジー」と長音にすべきところを、短編の訳者の伊藤典夫は、敢えて「ミムジイ」という表記をしていることが特筆すべき点として挙げられる。彼の意図としては、日本語の形容詞の語尾「〜い」を採用していると考えられる。その場合、「ミムジイ」という語自体が新たな形容詞の造語であることになる。仮にそうであるとすれば、「ミムジイ」のアクセントの位置は、語頭の「ミ」ではなく、後半の「ジ」にあることになるだろう。一方、「ミムジー」と長音を用いれば、アクセントの位置は初めの「ミ」の部分で良いことになる。¹⁶ 「ミムジイ」のアクセントの位置はともかく、「ジャバーウォッキー」においても、短編「ボロゴーフはミムジイ」においても、‘mimsy’の品詞については、やはりこれを形容詞ととるべきであるという点に異論はないであろう。

ここで、伊藤の訳についてさらに述べれば、他の大方の訳者と異なって、すべてカタカナで表記している点も特筆すべき点であろう。伊藤の訳した「ジャバーウォッキー」の冒頭の4行を改めて見てみよう。

ブリリグともなれば、スライジイ・トーヴは
 ウェイブにジャイアし、ギンプルシ
 ボロゴーフはまことミムジイとなりて
 モーム・ラースもアウトグレイブす¹⁷

‘borogoves’ や ‘mimsy’ に下手に訳をつけずに、そのまま音だけをカナに移すことで、説明不能の謎めいた概念をそのまま直接、何の改変もせずに読者の眼前に提示するという手法は、これはこれで見事なものではないだろうか。なぜならば、パジェットの短編でこのような謎めいた語句に込められているのは、現世の人間、特にユークリッドに代表される、定まった「ものの考え方」に囚われているような大人たちにとってはまったく理解不能な言語や象徴でも、幼い子供であれば、非ユークリッドも何のその、何でも理解できる、というテーマが設定されているからである。従って、こうした言語は、ハンブティ・ダン

¹⁶ もっとも、訳者である伊藤典夫が「ミムジイ」を形容詞に見せようとしているという説は、穿ちすぎた見方かもしれない。伊藤は、しばしばイ段の後の長音の部分で「イ」と記すことがあるからである。例えば、「ストーリー」を「ストーリーイ」、「サリー」を「サリーイ」とするなどである。『伊藤典夫翻訳 SF 傑作選』の「子どもの部屋」86頁、「思考の飴」285頁以下を参照。

¹⁷ 伊藤典夫訳「ボロゴーフはミムジイ」70頁。

プティの語釈で解決され得るものとは程遠い、未知の領域にとどめられるべきものなのである。そして、それを日本語で示すためには、柔らかな字面の平仮名より、硬質なカタカナが相応しいのは言うまでもない。先に引用した高山宏による平仮名ばかりの訳とはまことに対照的である。

映画『ミムジー：未来からのメッセージ』でも同じ箇所が使用されている。筆者の手元の DVD の日本語字幕を見てみよう。それは、『鏡の国のアリス』の「ジャバーウォッキー」の冒頭の一節を、エマのシッターがエマに朗読して聞かせる場面だ。映画の開始後ほぼ 34 分の場面である。元の英語で “It was brillig and the slithy toves / Did gyre and gimble in the wabe: / All mimsy were the borogoves, / And the mome raths outgrave. . .” とシッターが物語るのに合わせて以下の字幕が映る。¹⁸

“晩焼き時
ぬるシナ ぐるぐる草の上”

“ミムジーなボロ羽鳥
家ブタ ピークション”

これは、伊藤の訳を含めて、上に列挙した訳のいずれとも異なっている、なかなか変わったオリジナルの訳であり、これ自体かなり面白いものであるが、差し当たり我々にとっての要点は、‘mimsy’ が「ミムジーな」と、ここでも形容動詞的に訳されている点である。この字幕の作成者は不詳であるが、彼ないし彼女もまた、我々と同じ解釈をして訳しているのだ。さらにそれと同時に、固有名詞としての「ミムジー」というカタカナ表記をも視覚的に表現している。この点で、この字幕作者は（あるいは、映画の日本版 DVD の担当者は）、作品の本質をよく理解していると言えるであろう。

もっとも、この場面が映画全体に対して持つ重要性は、おそらくこれとは別のところにあるだろう。それは、この朗読をきっかけに、エマが『鏡の国のアリス』の中に ‘mimsy’ という語句があったことに気づき、併せて、本に挿入されている写真の中のアリス・リデルが、自分が持っているのと同じウサギのぬ

¹⁸ このシッターは ‘gyre’ と ‘gimble’ を「ガイヤ、ギンブル」と発音している。これらの 2 語は「ジャイア、ギンブル」とか「ジャイア、ジンブル」などと読まれる場合もあり、発音が一定でない。

いぐるみを持っているのを見出す点である。さらにこの場面では、エマが自分の得た能力を得意気に披露し、自分の手が無数の分子に分解されても平然としている。その様子をシッターが見て驚愕するという、物語の佳境に徐々に入っていく一連の流れこそが重要なのである。いずれにせよ、‘mimsy’ という語は、訳し方は多々あるものの、元来は「みむじき」や「ミムジーな」などと形容詞的に訳すべきものであったことは明らかになったであろう。そしてそれが映画では、こうしたマイナスイメージは払拭されると共に、可愛らしいウサギのぬいぐるみを表す ‘Mimzy’ という固有名詞へと変化することとなるのである。

III

以下においては、「ミムジイ／ミムジー」(mimsy/mimzy) という語の品詞がどういふ経緯で形容詞から固有名詞へ変化することになったかについて、さらに細かく論じてみたい。短編と映画の元になった詩「ジャバーウォッキー」に再び遡って考えてみよう。この詩の文句 ‘All mimsy were the borogoves’ は、この文の全体を倒置であると解釈して、主語を ‘the borogoves’ とみなし、述語を ‘all mimsy’ とみなすのが自然で正しい解釈であった。すなわち、「ボロゴーフは、ミムジイ／ミムジーだ」が正しい訳し方であるということになる。ところが、何かの弾みで、この自然で正しい解釈とは逆に、主語が ‘all mimsy’ に見え、述語が ‘the borogoves’ に見えてしまう、ということはないであろうか。主語が先にあり、補語が後に来るといふ順序は、英語の構文として極めて一般的であるといふ事情から、このように、主語→補語 の語順に見えてしまうといふことは、決して異常なことではないだろう。その場合には、前半の ‘all mimsy’ が主語で、‘the borogoves’ が述語(ないし補語)となる。日本語では「すべてのミムジーは」が主部、「ボロゴーフである」が述部となる、ということである。仮にそのようにとれば、あたかも、‘mimsy’ ‘ミムジー」といふ名の何らかの「もの」があって、それがたくさん集まっているのが ‘all mimsy’ ‘すべてのミムジー」であるということになるのだ。この場合、‘all’ は、「まったく」や「すっかり」といふ意味の副詞ではない。「すべての」といふ意味の形容詞であるといふ扱いになる。結果的に、‘All mimsy were the borogoves’ という句を全体として見れば、「ミムジイは、皆ボロゴーフだ」あるいは「すべてのミムジーは、ボロゴーフだ」といふことになる。先程、我々が確認した、本来の主語と述語の順序が、このような些細な操作によって、いとも簡単に逆転してしまった訳である。

そもそも‘mimsy’にせよ‘borogoves’にせよ、実体が今ひとつ定かでない造語であるから、どちらを主語として捉えてもあまり違和感がないという事情が元々存在する。こうした事情が、‘mimsy’を形容詞ととつても、固有名詞ととつても、大差ないように思われることの根底にはあるだろう。パジェットの小説の邦題は「ボロゴーフはミムジイ」なのであるが、これを「ミムジイはボロゴーフ」と言い間違えた人物さえも、筆者の周囲に実際にいたほどである。

ここで注意すべき点は、先に述べた、‘all’が、本来は「まったく」や「すっかり」という意味の副詞であるということが、先に列挙した訳を見ると、あまり十分に表されていないように見えるということである。一定数の翻訳で、「すべて」や「みな」が用いられている。また、‘all’が独立した形でしっかりと訳されており、訳文全体に溶け込んでいるような例も多く見られる。正しく訳されているのは、「いと（も）」や「うたて」、「げに（も）」などである。これ以外の「すべて」や「みな」は、間違いとまでは言い切れないが、少し問題がありそうな訳し方なのである。こうした訳し方が散見されるということは、裏を返せば、ちょうど我々が指摘したような逆転現象が起こること自体が、あまり不思議なことではない、ありふれたことであるということの証左にはならないだろうか。

さて、ここから、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』の中で‘Mimzy’という固有名を持つウサギのぬいぐるみが創作されるまでは、ほんの一步であるに過ぎないだろう。『鏡の国のアリス』の「ジャバーウォッキー」にも、短編「ボロゴーフはミムジイ」にも登場しなかったウサギのぬいぐるみが、映画の中で生み出されたきっかけの一つは、以上に見てきた主語と述語の極めて簡単な逆転にあった、と言えるのではないだろうか。¹⁹

ところで、この、愛らしいウサギのぬいぐるみは、前に記したように、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』では、1冊の『アリス』の本に添えられた写真の中に、アリス・リデルの手に抱えられて、彼女と共に写真にさりげなく写り込んでいるものだ。この本は一見して版形の大きな豪華版ないし愛蔵版と言ふべきものなので、おそらく、『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』が共に1冊に収められているものであろう。この1860年の日付のある写真自体は大変有名なものなので、いやしくも『アリス』を好んで読んだことのある

¹⁹ ぬいぐるみがウサギであって、熊やイルカなどの他の動物ではないのは、『不思議の国のアリス』に登場する白うさぎ（The White Rabbit）や三月兎（March Hare）を反映しているからであるのは言うまでもない。

る者なら、誰もが一度は見たことがあるものだろう。好んで、と言った理由は、この写真は、『アリス』の版本なら何にでも添えられているものである、という訳では必ずしもないからである。『アリス』の物語を収めた本よりはむしろ、他の一般向けの、『アリス』やキャロルを扱った概説書や解説書などの方によく見られるものである。例えば、桑原茂夫の楽しい本『チェシャ猫はどこへ行ったか』の132頁や、千森幹子の労作『表象のアリス』の23頁などで同じ写真を見ることができる。²⁰

この写真の知名度が実際にどの程度かはさておき、映画の中でウサギのぬいぐるみが写真に写っていることに関して、さらに詳しく考えてみよう。元の写真を見たことはあっても、写真の中のアリスが実際には何も物体を手にしていないことまでは記憶していないような読み手も大勢いるに違いない。そうした者にとっては、映画のこの仕掛け、すなわち、本来アリスが手にしてはいなかったウサギのぬいぐるみを、アリスがその手に持っているかのように処理した画像をほんの数秒間使用するという技法は、極めて効果的であったろう。今日でこそ簡単に捏造できる物であるが、ある「もの」が写真に写っていたということは、その「もの」が確かに実在したということの確たる証拠になったからである。本論の筆者自身も、元の写真は何度も目にしていたのであるが、実際に細部がどうだったかは定かでなかったため、この映画のシーンを見た後で、改めて例の写真調べてみた次第である。そして、実際にはアリスは手に何も持っていないことを確認することができたのである。

では、写真の映り具合に関して検討してみよう。我々が実際に元の写真を仔細に見てみれば、以下のようなことが分かるであろう。写真の中のアリスは、袖のゆったりした白い服を着ている。解像度の良くない図版では、袖の膨らみがちょうど何か「もの」を持っているように見える。その「もの」は、ちょうど扇のように見えなくもない。こうしたことから、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』の制作者たちは、この扇と見えるものをウサギのぬいぐるみに置き換えてみた、というのが真相ではないだろうか。とは言え、この工夫の源がいかなることであったのかは実際には不詳なのであるが、以下のことは明らかだろう。それは、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』のエマと、2つの『アリス』物語の一義的な関係者、アリス・リデルとが、時と場所を越えた

²⁰ 桑原茂夫『チェシャ猫はどこへ行ったか』（河出書房新社、1996年）、千森幹子『表象のアリス：テキストと図像に見る日本とイギリス』（法政大学出版局、2015年）を参照。

繋がりを持っていることが明瞭に示されているということ、そしてそれを示すために、こうした写真の加工は非常に効果的で見事な手法であったということである。

この映画には賛否両論があることは先に述べたとおりであるものの、褒めるべき点も多く含まれているのもまた事実であると言える。以下においてはそうした美点を挙げてみたい。それは、家族愛や人間愛のテーマ、ノアやエマら子供の純真な心、未来の人類の危機を救おうとする年老いた科学者、子供を見守る両親や、理科教師とそのフィアンセ、空中で回転する石や、海鼠状の「発生装置」から発するエネルギーに満ちた光などだ。²¹ 天空へ伸びていく構造物とその残像として映るマンダラ模様、これらを表現する精密で美しいCG、非日常的で奇妙な現象に付随して演奏される音楽のセンスなど、いろいろなレベルでよく工夫して作られている、というのが筆者の評価である。

映画の音楽について言えば、ピンク・フロイド (Pink Floyd) の一員であるロジャー・ウォーターズ (Roger Waters, 1943-) が関わっている。エンドロールで彼の印象的な“Hello (I Love You)”が流れるのである。このことはネット上にも紹介されている。

In March 2007, the Waters song “Hello (I Love You)” was featured in the science fiction film *The Last Mimzy*. The song plays over the film’s end credits. He released it as a single, on CD and via download, and described it as “a song that captures the themes of the movie, the clash between humanity’s best and worst instincts, and how a child’s innocence can win the day”.²²

これと同じ曲は、映画開始後 18 分ほどのところで、子供たちの母親がイヤホンでこの曲を聴いている場面でも効果的に使われている。兄のノアが、様々なガジェットの中の一つである巻貝を耳に当てると、通常聞こえるはずのない自然の中の様々な音響を聴けるようになるのだが、この曲もその一つなのである。

²¹ 日本版 DVD には、‘generator’ に「発電機」という字幕がついているが、単なる電気を発電するための物ではなく、未来につながる光の構造物を中空に出現させたり、物質を転送するエネルギーを発生させたりするものであるので、正しくは「発生装置」などと訳すべきである。

²² Wikipedia, “Roger Waters” の項。

<https://en.wikipedia.org/wiki/Roger_Waters#cite_note-90> (2020 年 11 月 28 日閲覧)

徐々に新たな能力に目覚めて行くノアを描きながら、母親の音楽の趣味の素晴らしさをさりげなく表現しているようである。この岸辺での場面は、全体として、接写の映像と音楽、音響を組み合わせた、映画芸術ならではの、観客の印象に残る場面の一つであると言えるだろう。

物語の伏線もよく考えられているものである。ノア少年がトラックの運転ができたのは、日頃からテレビゲームでハンドル操作に習熟していたからであったり、彼が、サイエンス・プロジェクトで蜘蛛を操ったのと同じ技能を駆使して、監視カメラに虫を集らせて見えなくさせたりと、伏線の巧みな張られ方についても枚挙にいとまがない。

本論で先に取り上げた微妙な綴り字の改変も、こうした工夫の一つに含めて考えても良いものであろう。映画制作者たちは、ついすっかり綴りを改変してしまったなどということではない。彼らは意図的に‘mimsy’の綴りの‘s’を‘z’に置き換えて、‘mimzy’という綴りにしているのだ。1字だけの微妙な変更によって行なわれたことは、品詞の変更をさらに確実なものにすることに他ならない。綴り字1字の変更によって、よくある英語の形容詞の語尾‘-sy’が‘mimsy’という語から消え、その代わりに語尾として‘-zy’を持つことに変更されたことで、‘mimzy’という語がますます名詞らしくなっているのである。そして、映画のタイトルとしてすべて大文字で *The Last Mimzy* という表記がなされれば、‘Mimzy’は間違いなく固有名詞に見えることになる。²³ このように、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』には、作品の内容にも題名の表記にも、元の短編にはない独自の工夫が様々な形で施されているとすることができるのである。

IV

以下においては「ミムジー」「mimsy」という固有名詞の現状について概観して行こう。「ボロゴーフ」は人名らしくないので、こういう名前の人物が実際にいるかどうかについて、筆者は承知していないのだが、一方で「ミムジー」という名前の人物は、今日、現実の世界にも虚構の世界にも実在する。その数は決して多くはないが、具体例をいくつか挙げておく。

²³ ただし、エンドロールでは‘the last mimsy’と、表題はすべて小文字で表記される。さらに、登場人物名もすべて小文字である。こうした手法は、近年の映画ではしばしば見られることであるが、この映画に関して言えば、控えめな感じが出ていて良い。

古いところから見ていこう。OED の第2版によれば、‘mimsey’の項目には用例が10あまり挙げられている。²⁴ その最古のものは、当然ながらキャロルからの例であり、1855年の *Mischmasch* に、はじめて ‘All mimsy were the borogoves’の語句が出た時になっている。1871年の『鏡の国アリス』の「ジャバーウォッキー」はどういう訳か省略されていて、次には1880年の *Abtrim & Down Gloss* における用例が挙げられている。次いで、1895年の S. Christian による使用例となっているが、これらはいずれも依然として形容詞であるようだ。OED では挙げられていないが、ネットで調べてみたところ、Florence Eugenie Davidson による “Just an Episode” の中に Mimsy という名の人物が登場している。この場合は、女性の人名であるらしい。出典は、*Chambers’s Journal, sixth series, vol.1, Dec. 1897-Nov. 1898* (London & Edinburgh: W. & R. Chambers) である。『鏡の国のアリス』が書かれたのは1871年であるが、それから20数年後には、ミムジーという人物がいたことになる。もちろん、これ以前にミムジーという名の人物が、現実または虚構の世界に存在していたということは大いにありそうなことであるから、これは今後の研究課題である。

逆に、最近の例では、2014年から2015年にかけて放映された日本のアニメーション作品『SHIROBAKO』の主人公の「みゃーもり」こと宮森あおいのスタンドの一つがミムジーという名前であった。この海賊ないしパイキング風の女の子の人形は、常にロロという名の白いクマのぬいぐるみと共に存在し、2人で分担して宮森あおいの心の内を代弁する。ちょうど、漫才のボケとツッコミのようにも見えるいいコンビである。このアニメは、近年ますます盛んになってきているアニメ業界の内実を描いた一種の群像劇だが、劇中劇ならぬ、アニメ中アニメも描かれ、メタ・アニメの側面をも持つ、非常に興味深い作品である。日本のアニメ『SHIROBAKO』のミムジーは、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』のウサギのぬいぐるみのミムジーからその名前を受け継いでいる訳である。一方、熊のぬいぐるみロロは、その外形を受け継いでいると考えられる。ロロは熊ではあるが、その体形や体色が、ウサギのぬいぐるみのミムジーを如実に想起させるからである。²⁵

上記の2例では『アリス』やキャロルとの関連の程度は不明であるが、『アリス』やキャロルと深い関連を持っているという点で興味深いものとしては、

²⁴ OED では、‘mimsey’の項目の中に ‘mimsy’ と ‘mimzy’ が2つとも含まれてしまっているが、この両者を区別しようというのが本論の立場である。

²⁵ ピクシブ百科事典「ミムジー&ロロ」の項による。<<https://dic.pixiv.net/a/ミムジー%26%20ロロ>> (2020年11月26日閲覧)

Martin Drapkin の2011年の小説 *Ten Nobodies (and Their Somebodies)* を挙げるべきだろう。これは、シェイクスピアやカスター将軍、マリリン・モンローなどの10人の著名人の傍らにいた、名もない10人の人物に焦点を当てた作品であるが、その一人が、年老いたルイス・キャロルの友人ミムジーである。この少女は「黄金の午後」を記念したピクニックに参加する。この人物設定は『アリス』のみならず映画『ミムジー』にも由来しているように見える。

あまり知られていないかも知れないが、有名な『ハリー・ポッター』シリーズにもミムジーが登場する。グリフィンドールの、ほとんど首無しニック (Nearly Headless Nick) の名前の一部にはミムジーという語が含まれているのだ。彼の本名は、Sir Nicholas de Mimsy-Porpington KG なのである。²⁶ 斬首されたにもかかわらず、手違いで首の皮一枚残した状態になってしまった、情けない中途半端な状態の人物像と、‘mimsy’ という語が本来持っていると思定される、‘flimsy and miserable’ に由来する、「みむじき」という訳語に代表されるような、情けない語感とがよく合っている。もちろんこれはハンプティ・ダンプティの語釈に沿った解釈であって、バジェットが込めた謎めいた意味合いとも、ウサギのぬいぐるみのミムジーという名が醸し出す可愛らしい語感とも異なっているが。なお、語感については『ハリー・ポッター大辞典』の彼の項目に記載がある。それによれば「英語で *mimsy* は「とりすました、弱々しくて控えめな」という意味。」であるとのことである。²⁷ この説明の後半部分は、我々の解釈と一致する記述だ。これは「大人しい」などと言い換えてもいいだろう。ただし、前半の「とりすました」に関しては、検討の余地がありそうである。

フィクションから現実の世界に目を転じてみると、往年の女優、ミムジー・ファーマー (Mimsy Farmer, 1945-) の名も「ジャパーウォッキー」の ‘mimsy’ に由来する。彼女の本名はマーレ (Merle) であるが、デビュー作『スペンサーの山』 (*Spencer's Mountain*, 1963) 当時から、ミムジーを名乗っていたのである。また、彼女の代表作は『モア』 (*More*, 1969) であるが、その音楽を担当したのは、先に述べたロジャー・ウォーターズであった。何かの因縁を感じるが、これはまた別の話である。

以上のように固有名詞としての「ミムジー」は、『鏡の国のアリス』以降、短編「ボロゴーフはミムジイ」と、その映画化『ミムジー：未来からのメッセ

²⁶ ‘KG’ は、ガーター勲章を授与された者の意。

²⁷ 寺島久美子『ハリー・ポッター大辞典』（原書房、2005年）333頁。

ージ』を契機に、日本やイギリス、アメリカなど、いろいろな国で徐々に広まってきた感がある。ごく普通の一般的な名前であると言うには程遠いのであるが、少なくとも日英米で散見される状況にはなってきていると言えるだろう。数の多少は、今は問題ではない。むしろ、「ミムジー」が固有名詞としても存在しうると言うことが重要なのである。ただし、ミムジーという名を付けたり名乗ったりする際に、本論で扱った作品とはまったく関係なくそうする、ということも当然あり得る。その場合、「ミムジー」という語の持つ本来の語感や印象を保持しているかどうかは個々の例で異なるであろう。元の形容詞として持つ意味合いを保持している場合もあれば、単に語呂が良くて可愛らしいというだけの理由で「ミムジー」という名前をつけたり名乗ったりするということも大いにあり得る。また、「ミムジー」は、当初はもっぱら女性の固有名詞として用いられてきたのであるが、徐々に性別を問わず用いられるようになって来たように見える点も興味深い。²⁸ この「ミムジー」という固有名詞は、その成立時の事情、すなわち、『鏡の国のアリス』の「ジャバーウォッキー」や、短編「ボロゴーフはミムジイ」と、その映画化『ミムジー：未来からのメッセージ』から恐らくは離れたところで、その語感の軽やかさも相まって、性別を問わず、また、虚構と現実とを問わず、今後も徐々に広まって行きそうな予感がするということである。²⁹ しかしながら、筆者として望むらくは、本論で扱った上記の作品群のことも「ミムジー」という名に接した際にはぜひ思い出して欲しいということに尽きる。

結び

以上見てきたように、ルイス・キャロル作『鏡の国のアリス』の「ジャバーウォッキー」から生まれたパジェットの短編「ボロゴーフはミムジイ」と、その映画化『ミムジー：未来からのメッセージ』において、「mimsy」という造語（カバン語）の形容詞は、最終的に形容詞から固有名詞に変化し、破滅の危機から未来の人類を救うウサギのぬいぐるみの名前になった。元来、「みむじき」

²⁸ Emil Reislyn の小説 *Mimsy* (2007) の主人公 Mimsy McCorkle は男性である。

²⁹ ミムジー (Mimsy) を名乗る現代アート作家もいる。彼女の代表作は、ISIS の装束を着せたシルバニア・ファミリーである。子供たちが大好きな、平和でのどかな動物のぬいぐるみの世界に、現代の人類が抱える宗教上の軋轢や闘争が侵入してくると言う、これは極めて風刺性の高い作品である。

などという訳がふさわしい、どちらかと言えば否定的で消極的な意味の‘mimsy’ではあったが、その綴りの末尾を‘-sy’から‘-zy’に変化させることで、そうしたマイナス要因は払拭され、この名を持つ愛らしいウサギのぬいぐるみは、人類最後の希望を託されるまでになったのである。人類の救済というこの重大な任務は、純真な心を持つエマと、エンジニアとして妹を支えることができた兄ノアの協力、さらには兄妹の両親や、理科の教師とそのフィアンセの、穏やかな人間性にも恵まれて、映画自体は幸福な結末を備えることになった。‘mimsy’という造語の、品詞と綴り字の変更という、一見極めて些細な変更が、物語世界の大きな発展に繋がったのである。

さらに映画では、『鏡の国のアリス』の版本にも重要な役割が与えられていた。主人公の少女エマに「ジャバーウォッキー」の詩の箇所をシッターが読み聞かせる場面では、詩の一節と同様にアリス・リデルの加工された写真が重要な役割を担っていた。この写真によって、同じ種類のウサギのぬいぐるみが、アリスの時代にもあったことが明らかになり、続くシーンでエマの特殊能力が具体的に発現されるという、極めて印象的な場面の展開になって行くのである。これは、悪くいえば写真の捏造なのだが、アリス・リデル本人がウサギを持っていたことの動かぬ証拠として観客が自然に受け取ることができるような映像表現になっていた。これ以外の箇所の多くのCGによる演出も見事であったのだが、この写真の、自然な加工技術も特筆に値しよう。

パジェットの短編「ボロゴーフはミムジイ」は、「ジャバーウォッキー」の難解な語句に基づいているため、物語の内容も結末も、どちらかと言えば不可解かつ不条理なものであったが、その一方で、『アリス』やキャロルの愛好者にとっては極めて楽しめるような作品であった。これに対して、映画『ミムジー：未来からのメッセージ』とは言えば、これとまったく逆の状況になっていると言えるだろう。すなわち、『アリス』の愛好者にとっては、アリス・リデルの写真こそ効果的に使われていたにせよ、キャロル色が薄まってしまっており、前面に出ていないという点で、多少残念な面があることは否めない。一方で、映画の結末や、内容に関しては、今日的なテーマを新たに取り入れたことで、かなり分かり易くなったと言えることができる。短編は好事家向け、映画は一般大衆向け、という違いがあるということだろう。

映画について言えば、「ミムジー」という名のウサギのぬいぐるみを少女に持たせたことで、短編のテーマが備えていた深い象徴性は失われたかもしれないが、商業映画としてみた場合は、2人の子役の魅力的な容姿と演技、CGや付随音楽の素晴らしさも手伝って、佳作と言って良い作品が仕上がったと筆者は

考える。映画自体の評価は、実はあまり高くなく、知名度も低いですが、本論を契機としてこの映画が再評価されることが望まれる。

最後に、本論で取り上げた、「ミムジイ／ミムジー」(mimsy / mimzy)という語が形容詞から名詞へ変化した事情について述べれば、そもそもの張本人は、ルイス・キャロルであるということになるだろう。奇妙な語句がどのようにして『鏡の国のアリス』の「ジャパーウォッキー」の中に発生したかについての仮説を示したのがパジェットの短編であり、その短編に基づいて独自のテーマを取り入れて映像化し、新たな世界を切り開いて見せたのが『ミムジー：未来からのメッセージ』であったということになる。すべての起源は『鏡の国のアリス』とその作者ルイス・キャロル、加えて、アリス物語が生まれるのに深く関わったアリス・リデルその人にあつたということに違いない。

参考文献

- Berrett, Jolynne. “A Look at the Logical Illogic of Lewis Carroll: Is This Science Fiction?” <http://www.joberrett.com/uploads/1/3/2/2/13223370/berrett_logical_illogic_of_lewis_carroll.pdf> (2020年11月25日閲覧)
- Carroll, Lewis. *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass, and What Alice Found There*. London: Penguin Books, 1998.
- Drapkin, Martin. *Ten Nobodies (and Their Somebodies)*. Dog Ear Publishing, 2011.
- Gardner, Martin, ed. *The Annotated Alice: Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass by Lewis Carroll*. Harmondsworth: Penguin Books, 1970.
- Midkiff, Emily. “The Alien Child” in Michael M. Levy & Farah Mendesohn, eds. *Aliens in Popular Culture*. Santa Barbara: Greenwood, 2019.
- Padgett, Lewis. “Mimsy Were the Borogoves.” Silverberg, Robert, ed. *The Science Fiction: Hall of Fame, Vol. 1, 1929-1964*. New York: Tom Doherty Associates, 1970.
- Shaufere, Stephen William. “Never, Ever Break Up a Family.” *Journal of Literature and Art Studies*, May 2014, Vol. 4, No. 5, 384-395. <<http://www.davidpublisher.org/Public/uploads/Contribute/55111ec6ad6cf.pdf>> (2020年11月25日閲覧)
- Taylor, Charles G. “Mimsy Were the Borogoves: A Play in One Act.” Woodstock: The Dramatic Publishing Company, 1965.

- 桑原茂夫『チェシャ猫はどこへ行ったか』東京：河出書房新社、1996年。
高橋良平 編『伊藤典夫翻訳 SF 傑作選：ポロゴーフはミムジイ』東京：早川書房、2016年。
高山宏 訳、マーティン・ガードナー／ルイス・キャロル『詳注アリス 完全決定版』東京：亜紀書房、2019年。
千森幹子『表象のアリス：テキストと図像に見る日本とイギリス』東京：法政大学出版局、2015年。
寺島久美子『ハリー・ポッター大辞典』東京：原書房、2005年。
山内暁彦「『鏡の国のアリス』『ジャバーウォッキー』中の造語 ‘wabe’ ‘gyre’ ‘gimble’ について」徳島大学総合科学部『言語文化研究』第27巻、13-48頁、2019年。

- ルイス・キャロル、生野幸吉 訳『鏡の国のアリス』東京：福音館、1972年。
——、岡田忠軒 訳『鏡の国のアリス』東京：角川書店、1959年。
——、河合祥一郎 訳『鏡の国のアリス』東京：角川書店、2010年。
——、佐野真奈美 訳『鏡の国のアリス 新訳』東京：ポプラ社、2015年。
——、杉田七重 訳、ロバート・イングペン 絵『鏡の国のアリス』東京：西村書店、2015年。
——、芹生一 訳『鏡の国のアリス』東京：偕成社、1980年。
——、高杉一郎 訳『鏡の国のアリス』東京：講談社、1994年。
——、高橋康成・沢崎順之助 訳『原典対照 ルイス・キャロル詩集』東京：筑摩書房、1989年。
——、高山宏 訳、マーチン・ガードナー 注『鏡の国のアリス』東京：東京図書、1980年。
——、高山宏 訳、マーチン・ガードナー 注『新注 鏡の国のアリス』東京：東京図書、1994年。
——、高山宏 訳、佐々木マキ 絵『鏡の国のアリス』東京：亜紀書房、2017年。
——、高山宏 訳、建石修志 絵『新訳 不思議の国のアリス 鏡の国のアリス』東京：青土社、2019年。
——、矢川澄子 訳、金子國義 絵『鏡の国のアリス』東京：新潮社、1994年。
——、安井泉 訳『鏡の国のアリス』東京：新書館、2005年。
——、柳瀬尚紀 訳『鏡の国のアリス』東京：筑摩書房、1988年。

「ボロゴーフはミムジイ」と『ミムジー：未来からのメッセージ』について

- 、山形浩生 訳、スゾアキコ 絵『鏡の国のアリス』東京：朝日出版社、2005年。
- 、脇明子 訳『鏡の国のアリス』東京：岩波書店、2000年。

参考資料

- 『ミムジー：未来からのメッセージ』（*The Last Mimzy*）ロバート・シェイ監督、ニュー・ライン・シネマ、2007年。DVD。
- 【町山智浩のアメリカ映画特電】『ラストミムジー』ヘンリー・カッターのSF小説『ボロゴーフはミムジイ』の映画版
<https://mclip.tv/video/_F82pGS-Z1A/>（2020年11月23日閲覧）
- Wikipedia, “Roger Waters”
<https://en.wikipedia.org/wiki/Roger_Waters#cite_note-90>（2020年11月28日閲覧）
- ピクシブ百科事典「ミムジー&ロロ」
<<https://dic.pixiv.net/a/ミムジー%26%20ロロ>>（2020年11月26日閲覧）

